

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520404

研究課題名（和文）

伝播類型の視点からみた日本語形成史の試論的研究

研究課題名（英文）

Development of Japanese dialects: from the View point of influential Movement of Central Dialect and its Localization

研究代表者

彦坂 佳宣 (HIKOSAKA YOSHINOBU)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：00111237

研究代表者の専門分野：国語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：伝播類型、『方言文法全国地図』、言語地理学、方言文献史、意志・推量、条件表現、待遇表現

1. 研究計画の概要

『方言文法全国地図』の主要文法図の解釈を、言語地理学的・方言文献学的方法により、その伝播類型を探り、日本語形成史の試論とする

2. 研究の進捗状況

ほぼ完了したものは意志・推量、条件法、準体助詞、半ば完了は主格助詞表現、待遇表現、これからのものは動詞活用類のものである。これらは広域的なまとまりをもった分布をなす主要文法項目であり、そうしたものの伝播類型点は或る程度見当が付いてきた。

意志・推量については、古代語のベシ・ムズなどが関東以北・中部地方にあり、かなり古態の様相を見せるのに対し、西日本は、ムズの痕跡がみられはするが、新しいウによる分布模様が広くあること、また意志形式と推量形式の分化する程度が高いことが地理的模様として分かって来た。条件法については、順接確定条件がサカイ・ヨッテ・ケン・デ・ニなど多彩な語形があり、西日本を中心に広がり、東日本には日本海側への進出がみられ、東日本はカラー色であるのに対し、順接仮定条件はきわめて明瞭な全国型の周圈的分布を呈して、対照的であることが注意される。この理由をさぐる必要がある。

準体助詞については、連体格助詞のノ・ガの問題とからんだ国語史との関連が考えられた。ガ連体格が近代まで残った周辺地域ではその連体格用法から転じた準体助詞はガとなり、一方で比較的開けた中央地域ではす

でに連体格がノに統一され、ここには準体助詞ノが生じたという関係である。しかし、九州や東北ではまた特有のト・ナがあり、この問題は連体格助詞以外の視野で研究する必要があることが分かっている。

完了半ばのものうち主格助詞表現は、中国地方によく主格表示があらわれ、中央地域に新形式が現れやすいことと整合しない点がある。中国地方の中世文献も新たに見出し、この模様も同じく主格表示が進んでいて、同じ傾向であるが、その理由が未解決である。

まだ残っているものは動詞活用類の分布研究である。二段活用の一段化、ナ変の五段化が今日のこの地域は九州が主であり、分布と史的解釈は明らかであり特に問題はない。しかし、サ変・カ変の分布は複雑でこれから手をつける段階である。

なお、以上のどれも、単に研究対象の事象のみでなく、隣接的な事項との関連も考えられる。こうした広い視点での検討はもうすこし時間が必要であると考えている。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)

上記2の分野につき、問題とする事項の新古により、大まかな伝播の違いがあることがほぼ明らかになってきたと考える。

中央語で比較的歴史の古い意志・推量、条件法などの諸形式は、全国分布型をとり、近畿から西日本には新しい形式が比較的すみやかに、東日本へは日本海側への伝播が早く、

太平洋側には遅く、従って太平洋側には古い形式の方言化した模様がみられる。また、東西両端の九州西部・南部と東北地方には古態的な模様とその方言化の模様が強い。

これに対し、中央でも比較的新しい時代に成立した準体助詞、逆接条件のうちのケレドモ類、敬語のうちのアナタ、オーニナルなどの形式は、近畿から西日本へ、次に飛び火して江戸・東京からも放射され、上方と江戸の東・西の2つの中心地から放射される模様があり、今まで東西方言として二分されていたものが、西部方言の内部でも近畿が中央で九州と中部地方が周辺部、東日本でも関東中央部が中心となり関東西部と東北が周辺部、そしてこの場合の東部方言では新しい形式が日本海側よりも太平洋側を北上する模様があるように思う。このような東・西ごとの方言周圏論的な伝播模様とその経路の違いのあることが分かってきた。

4. 今後の研究の推進方策

上記3の、国語史における事項の新古と伝播類型との関係を、もう少し細部にわたり考察したい。地域ブロックである中国・四国・九州、関東・新潟・南奥羽・北奥羽にわけた伝播の特色を、もう一段おりたった形でとらえるのが目標である。

勿論、その基礎資料として、重要事項の地図の解釈、また方言文献学的研究を、並行して進めていく。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

彦坂佳宣、「近世後期庄内郷土本類の順接条件 - 『方言文法全国地図』解釈の前提として - 」、『同大語彙研究』、査読無、12号、2010、27-42ページ

彦坂佳宣、「東海・東山地方における意志・推量表現の交渉と分化」、『論究日本文学』(立命館大学日本文学会)、査読無、91号、2009、1-12ページ

彦坂佳宣、「東海・ナヤシ地方の勧誘表現」、『名古屋・方言研究会会報』、査読無、25号、2009、21-40ページ

彦坂佳宣、「『方言文法全国地図』と国語史との分布の相関」、『日本語学』、査読無、9月臨時増刊号、2007、156-163ページ

彦坂佳宣、「諸方言史の束としての日本語史」、『國學院雑誌』、査読無、2007、108-11号、298-310ページ

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕